科目コード／科目名 (Course Code / Course Title)	EX608／演習 (Seminar)		
テーマ／サブタイトル等 (Theme / Subtitle)	「家族と刑法」の理論と現実		
担当者名 (Instructor)	深町　晋也(FUKAMACHI SHINYA)		
学期 (Semester)	通年(Full year)	単位 (Credit)	4単位(4 Credits)
科目ナンバリング (Course Number)	LPX4910	言語 (Language)	日本語 (Japanese)
備考 (Notes)	その他登録		

授業の目標(Course Objectives)

この演習は，我々の社会における最小の人的結合体である「家族」と刑法を巡る様々な問題を，刑法を始めとする様々な法分野，及びそれ以外の社会科学等の知見をもとに考えるものである。家族の持つ自律的な秩序を刑法がどこまで尊重し，また，どのように刑法が家族に介入していくべきかという問題は，今後の家族のあり方を考える上でも，また，今後の刑法のあり方を考える上でも，極めて重要なものである。

この演習では，こうした問題について，様々な角度からアプローチを行い，その解決(の糸口)を探っていくこととする。

In this seminar, we will consider various issues related to criminal law and the family, which is the smallest human unit in our society, based on the findings of various legal fields including criminal law and other social sciences. The question of to what extent criminal law respects the autonomous order of the family, and how criminal law should intervene in the family is extremely important in considering the nature of the family in the future, as well as in considering the nature of criminal law in the future.

In this seminar, we will approach these issues from various angles and look for solutions (or clues) to them.

授業の内容(Course Contents)

従来，「法は家庭に入らず」という法格言が示すように，家庭内におけるトラブルや揉め事に対しては法は関与しないという考え方が広く受け入れられ，そうした考え方を元にした法制度が制定されてきた。例えば，配偶者や直系血族などによる窃盗などの財産犯罪については処罰を行わないとする「親族相盗例」(刑法 244 条 1 項)は，正にこうした考え方を端的に示したものと言える。

しかし，近年，こうした法格言の限界が意識される問題領域が，数多く見られるようになっている。その代表が，家庭内暴力(DV)や児童虐待といった，家庭内で行われる暴力であるが，それ以外にも，親権者間での子の奪い合い，家庭内での性犯罪や財産犯罪，子どもや高齢者の遺棄，家族が死亡した後の扱いなど，むしろ法が適切な時点で積極的に介入すべきではないかと考えられる事象は枚挙に暇がない。

このような状況の下で，刑法もまた，家庭内で起こる数々の問題に直面せざるを得ないし，どのような解決策を提示すべきかについて，他の法分野や学問領域の成果も援用しつつ，真摯に取り組む必要がある。

この演習では，こうした現代的な問題について，様々な角度からアプローチを行う予定である。論文や判例，立法資料といった文献に学ぶのはもちろんであるが，時にはゲストスピーカーを招待して，家族と刑法を巡る様々な問題に関する意見を聞くといったことも予定している。

刑法に関心のある学生はもちろんであるが，他の法分野や法律学以外についても関心を有する，好奇心の強い学生の参加を期待している。

In the past, as the legal maxim "the law does not enter the home" indicates, the idea that the law does not get involved in troubles and disputes within the home has been widely accepted, and legal systems have been enacted based on this idea. For example, the larceny committed against relatives, which states that property crimes such as theft by a spouse or lineal blood relative will not be punished, is a clear example of this way of thinking.

In recent years, however, there have been a number of problematic areas where the limitations of this legal maxim have been recognized. In addition to domestic violence and child abuse, there are many other issues in which the law should actively intervene at the appropriate time, such as child abduction by a parent, sexual and property crimes in the home, abandonment of children and the elderly, and funeral ceremony after the death of a family member.

Under such circumstances, criminal law also has to confront a number of problems that occur in the family, and it is necessary to tackle them seriously, drawing on the results of other legal fields and disciplines, to determine what solutions should be proposed.

In this seminar, we will approach these contemporary issues from various angles. In addition to studying literature such as articles, precedents, and legislative materials, we will occasionally invite guest speakers to share their opinions on various issues related to the family and criminal law.

It is of course hoped that students with an interest in criminal law will participate, but students from other legal fields as well as those with a strong sense of curiosity and an interest in non-legal areas are also welcome.

授業計画（Course Schedule）

1. 初回打ち合わせ
2. DV の被害者が加害者に反撃するとき（その1）
3. DV の被害者が加害者に反撃するとき（その2）
4. 児童が家庭の中で性的虐待に遭うとき（1）
5. 児童が家庭の中で性的虐待に遭うとき（2）
6. 家庭において児童ポルノが作り出されるとき
7. 児童が家庭でタバコの煙に苛まれるとき
8. 家族によって自分の大切なものが奪われるとき
9. 両親が子どもを巡って互いに争うとき（その1）
10. 両親が子どもを巡って互いに争うとき（その2）
11. 死者がその家族によって弔われないとき
12. 子どもが親による保護を受けられないとき
13. 子が親から「しつけ」を受けるとき
14. ゲストスピーカー回
15. 「家族と刑法」の更なる事案：家庭内での無理心中と同意殺人
16. 「家族と刑法」の更なる事案：安楽死と家族の意思（その1）
17. 「家族と刑法」の更なる事案：安楽死と家族の意思（その2）
18. 「家族と刑法」の更なる事案：安楽死と家族の意思（その3）
19. 「家族と刑法」の更なる事案：家庭内での死体遺棄
20. 「家族と刑法」の更なる事案：住居権者の意思が対立する場合
21. 「家族と刑法」の更なる事案：家族による犯人隠避・家族による盗品関与
22. 「家族と刑法」の更なる展開
23. 「家族と刑法」の更なる展開
24. 「家族と刑法」の更なる展開
25. 「家族と刑法」の更なる展開
26. 「家族と刑法」の更なる展開
27. ゲストスピーカー回
28. 最終まとめ・予備日

授業時間外（予習・復習等）の学習（Study Required Outside of Class）

演習参加者は，半期に 1 回あるいは 2 回程度，演習時間内での報告を行ってもらうが，そのための予習などが欠かせない。

また，自分の担当以外の回についても，随時，指定された文献を読み，積極的に議論に参加することが求められる。

成績評価方法・基準（Evaluation）

演習中の報告(40%)/演習における発言など(40%)/演習への参加意欲(20%)

テキスト（Textbooks）

1. 深町晋也、2021 年、『家族と刑法』、有斐閣 (ISBN:978-4-641-13951-0)

春学期は指定テキストの各回を扱うため，受講生は必ずテキストを用意すること。

参考文献（Readings）

参考文献は適宜指定する。

その他（HP 等）（Others(e.g.HP)）

＜選考方法＞

採用人数：15 名程度

配当年次：2・3・4 年次

選考方法：レポート

①題目：「家族と刑法」というテーマについてあなたが関心のあるところを，自由に記述して下さい。

②字数：1000 字～1500 字程度

演習論文：実施しない

注意事項(Notice)